

## 日本英語教育史学会 会報

275

2016 年 6 月 30 日

**HiSELT** Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒120-8551 東京都足立区千住旭町 5 番  
東京電機大学工学部英語系列 河村和也研究室  
tel : 03-5284-5641 fax : 03-5284-5699  
e-mail : membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)

ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873

三菱東京 UFJ 銀行千住中央支店【普通】0997182

学会公式ウェブサイト [www.hiset.jp](http://www.hiset.jp)

## 第32回全国大会 (東京大会) 報告

2016 (平成 28) 年 5 月 14 日 (土)・15 日 (日), 東京電機大学東京千住キャンパス (東京都足立区) において第 32 回全国大会 (東京大会) が開催されました。初日は島岡丘氏 (筑波大学名誉教授シニア・プロフェッサー) による「1 人称で語る 大塚キャンパスから筑波キャンパスへ—昭和 7 (1932) 年からの歩み—」と題する記念講演と 3 本の研究発表が行われました。第二日は 8 本の研究発表が行われ, 2 日間で延べ 55 名の参加者が集いました。ご参加の皆様, 関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。以下に出席者の感想を掲載します。ご参照ください。なお, 編集の都合で一部は割愛しております。



東京電機大学 1 号館正面外階段にて (2016.5.14)

## ◆(1) 大会全般について

東京での大会ということと島岡先生の記念講演とによるものと思いますが, 参加者も多く盛会となったことが何より喜ばしく思われます。河村先生には 大会実行委員長として準

備・運営は言うに及ばず, 総会では事務局長として何度も御登壇いただき, その上研究発表までこなされて, まさに八面六臂のご活躍, 御礼を申し上げるとともにお疲れの出ぬようにとお祈りいたします。



島岡 丘 氏

上野 舞斗 氏

広川 由子 氏

拝田 清 氏

## (2) 記念講演について

講師の島岡先生には昨年1月の記念例会でのシンポジウムのパネリストをお願いしていたところ体調を崩されてご入院ということがありましたので、お元気になられたのがうれしく、その上この度の記念講演を伺えるということで、特別講演ではなく記念講演と題されたことの意味をしみじみと噛みしめました。他教科ながら同僚中の茗溪会関係者についても東京教育大と筑波大との話は聞きにくいことがありますので——「ありましたので」と言うべきかもしれません——、演題に「1人称で語る」と付されたことの意味合いを若い人たちがどのように理解してご講演を伺ったのだろうかと思いました。

## (3) 研究発表について

特定のご発表ではなく全体にわたりますが、会長・副会長から新進気鋭の新入会員・若手会員が研究発表を行う学会というのは他に余り例がないのではないのでしょうか。隔月ながら研究例会を重ねての上に全国大会にてこのような状況というのは自慢してよいかと思えます。ただ、あわせて、これが2室にも3室にも及ぶという状況となることを、役員体制の若返りということも行われた今、希望したいと思えます。そしてこれが学会紀要への投稿本数の増加につながればと願っております。

<Dragon>

◆去年から専修大学の教職学会などには参加していましたが、今回のような学会は初めて

の参加でした。研究発表をされた先生方のテーマは、学習指導要領について、教科書について、英語のカナ表記について、教育政策についてなど、英語教育の歴史の中でのさまざまな分野に分かれていました。一度にこれだけ多くの発表を聞かせていただく機会はいままでありませんでしたので、この2日間は貴重な経験となりました。

印象に残ったのは、漢文に返り点をつけるのと同じように、英文にも読む順番をふろうという考えがあったことです。県立広島大学の馬本勉先生が発表をされている間に、実際に『ろんぐまんず読本』という本の中を見させていただきました。書き下し文のようなものが英語の下に書かれていましたが、漢文を横に読んでいるようで不思議な感じがしました。語順の違いを考えて、読みやすくしようとする工夫があったことがわかりました。

発表が終わった後の質疑応答の時間には、多くの質問や意見が飛び交っていました。学会は意見交換の場でもあり、それらを共有する場所なのだと感じました。

多くの知らないことに出会い、論理の一貫性が重要であると感じた2日間でした。貴重な機会をいただけたことに感謝いたします。ありがとうございます。

<aqua>

◆二日間を通じて、興味深いと感じた発表が二つありました。一つ目は、江利川先生の「アジア・太平洋戦争期における文部省と陸海軍の外国語教育政策」です。戦時中に英語



惟任 泰裕 氏



青田 庄真 氏



久保野 雅史 氏



江利川 春雄 氏

教育は行われていなかったと思っていましたが、そうではありませんでした。時間が少なくなりつつも英語の他にロシア語、中国語など陸軍や海軍で授業が行われていました。また、驚くことがありました。それは、日本が降伏した次の日に海軍で英語の授業をしていたことです。それだけ英語だけではなく教育自体の重要性を学びました。

二つ目は、河村先生の「河村重治郎の考えたこと」です。その中でも、辞書に残されたことばから刺激を受けました。そのことばとは、田邊先生が仰っていることと一緒に、英語を上達するには練習あるのみや辞書の箱を捨てるなど英語に対する姿勢、意識が書かれていました。こういったことばを胸に刻み、勉学に励んでいきたいです。

二日間を通して、発表や講演の内容に先生から教わったことと共通している点も多いと感じました。そういったことを考えながら聞くことが出来ました。

<Nao>

◆記念講演、英語のカナ表記、英文法の教科書の変化など、様々な分野のことについて多く学べる機会となりました。その中でも特に印象的だったのは、第二次世界大戦中における英語教育についてです。恥ずかしながら今まで私は、戦時中は英語を敵国の言葉とし、英語の勉強を一切していなかったのかと思っていました。しかし、相手国の動きや作戦を知る上で、言葉が分からないと不利な状況になることとなります。今回の発表で、実は軍

の中で英語教育は継続されていたのだということを知り、自分の中の歴史に対する考え方も少し変わりました。

いくつかの発表の際、何冊か貴重な古書を手にとる機会がありました。今よりも音声機器が発達していなかった当時、文面で本物の音や発音を読者に伝えようと、カタカナがふってあったり、漢文のように読む順に番号がつけてあるなど、様々な工夫がみられました。この学会に参加して初めて知ることばかりで大変勉強となりました。これからも英語の勉強を続けていく上で、どこかで今回学んだことがつなると良いなと思いました。

<flyingbird>

◆一日目は、島岡先生による記念講演から始まり、その後3名の先生方が研究発表をなさいました。どれも興味深いお話でしたが、島岡先生の講演からは特に多くのことを感じ取りました。英語を何十年にもわたって究めていらした方の歩みというものをお聞きする機会はありませんので、英語を専攻する者として多くの刺激を受けました。

二日目となる今日は、田邊先生を含む8名の研究発表が行われました。今日も興味深い研究発表ばかりで、大変勉強になりました。江利川先生が発表された、アジア・太平洋戦争期における英語教育というテーマが、印象的でした。戦時中、敵国語を使ってはならない、というような政策が行われていたというような話をどこかで聞いたことがあります。



川嶋 正士 氏



馬本 勉 氏



河村 和也 氏



田邊 祐司 氏

しかし、軍における教育など一部では生徒に対して英語教育が続けられていたという興味深いお話をお聞きし、驚かされました。

田邊先生の研究のお手伝い、そしてこの 2 日間の研究発表を聞いて、日本英語教育史というものに興味を持ちました。残りの大学生活の中で、英語を学ぶものとして少なくとも必要最低限知っておくべき日本の英語教育史の流れ等を学んでいきたいと思えます。

#### <Blue Sky>

◆一番印象に残ったことは、先生方の真剣さです。正直に申し上げますと、学会での発表のほとんどは私にとって難しいものばかりで、完全に理解することはできませんでした。しかし発表をしている方も聞いている方も、一つのテーマに対し集中し、また質疑応答を行っている様子は、まさに真剣そのものであり、濃密な時間が流れているように感じました。これは両者が同じだけ真剣に取り組まなければ、絶対に成り立たないものだと思います。先生方のレベルには全く至らないものの、自分なりに英語に真剣になってみようと思えました。

また発表の仕方についても、たくさん学ぶことができました。特に印象的に残っているものは、神奈川大学の久保野雅史先生の発表です。先生は数年前まで高校教員をなさっていたそうで、その経験を活かされた発表でした。非常にテンポがよく、難しいことをおっしゃっているはずなのに、とても分かりやす

かったです。どんどん引き込まれてしまいました。他の先生方も、グラフや図などを使用し、視覚的に分かりやすいものが多く、これからの参考にさせていただきたいと思いました。

最後に田邊祐司先生、二日間出席させていただきありがとうございました。また発表の準備のお手伝いもさせていただき、感謝しております。たくさんのお書物に触れることにより、先人の英語に対する熱が目を通して伝わってきました。そして学会での先生方の発表から、先人を大切にする気持ち、そして今の英語教育に対する熱を肌で感じることができました。また機会がございましたら、ぜひお手伝いさせていただきたいです。 <Gomez>

◆初めて体験する学会の雰囲気は、とても新鮮なものでした。

1 日目は 4 名の先生方による、主に英語の学びの歴史や、英語表記、英語学習に関するお話でした。これまで学んできた英語が、どのような歴史を辿り、今に至るのかということをお聞きし、英語の壮大さを感じました。英語に関する知識が乏しいため、難しく感じた点もありましたが、先生方のお話は探究心を揺さぶるものでした。

2 日目は 8 名の先生方による、主に英語音声の歴史や、学校英語のあり方、英語書籍に関するお話でした。普段あまり知ることのない、戦時中の英語学習のお話は、興味深いものでした。また日本人が英語を学ぶため、こ

れまでいかに工夫が凝らされてきたかということを感じました。日本で英語を普及させ、発展させるためにご尽力された先人のお話を、先生方から伺い、英語の本質に少しだけ触れることができたような気がします。なかでも、河村先生が発表された、「河村重治郎のことば」の数々がとても印象に残りました。学習者を信じ、励ます彼のことばを心に留め、これからも勉学に励みたいと思います。

<Cayu>

◆素晴らしい環境の下で充実した 2 日間を過ごすことができました。学会の運営にあたられた関係者に感謝申し上げます。研究発表については、いずれもレベルの高い発表だったと思います。私の興味を引いたのは河村先生の発表でした。河村重治郎について福井中学や横浜高商の生徒たちの声などが聞けたらよかったです。 <匿名希望>

◆久保野先生、江利川先生の研究発表は期待どおりのもので勉強になりました。小学校時代、皆勤賞の副賞として三省堂のクラウンをいただいたのが河村重治郎先生との間接的な出会いでしたが、本日、先生の業績について学べて、有意義な時間を共有できて光栄でした。どうもお世話になりました。

<木村一弘>

◆15 日のみの参加でしたが、14 日も参加していればよかったなと思いました。研究発表はそれぞれとても興味深く聞かせていただきました。全てが今に通じるのだなと感じました。同じ大学院生として、大学院生の発表を尊敬します。私もがんばっていこうと勇気もらいました。ありがとうございました。

<坂根喜代美>

◆初めてこのような大会に参加させていただきました。様々な研究を聞かせていただき、とても貴重な時間になりました。

河村重治郎についての研究では、最近では中学生でも電子辞書を持つ子が多いですが、

辞書の著者の言葉に触れてみるのも面白いなと思いました。 <箕浦昌美>

◆小田先生の紹介で参加しました。今までなかなか触れる機会のない話題ばかりだったので大変関心を持ちました。研究発表については、久保野先生、江利川先生、河村先生の発表が特に印象に残りました。久保野先生には、以前中学に勤務していた際に講演を聴かせて頂きました。発表、資料、方法含めて大変参考になりました。江利川先生の発表については、戦時中での英語教育推進の事実に驚きました。もっと深く詳しく知りたいと思いました。河村先生の発表については、Oral (Direct) と Translation method で「取り残された問題」について大変興味を持ちました。現代にも通じる話題ではないかと思いました。

<太田進>

◆(1) 大会全般について

それぞれ興味深い発表が手際よく配置され、楽しく勉強になりました。

(2) 記念講演について

最良のテーマの一つだと思います。伊村元道先生や鶴沢氏 (元大修館書店) などを講師に異なる視点から、あるいは別な分野・領域について、続編を期待します。

(3) 研究発表について

・「“5 文型”, 補語」: 5 文型という大きな脈、補語という難敵に立ち向かう研究、これからの楽しみにしています。

・「河村重治郎」: 軽妙な「バイリンガル辞世」に脱帽しました。 <S.T.>

◆初日の昨日は、島岡丘先生の記念講演から始まり、当時の学園紛争のことや、筑波大学のキャンパス移転についてなど、貴重なお話を聞くことが出来ました。その後、3 人の先生方の研究発表を聞きました。その中でも、英語カナ表記の比較についての発表は、それぞれの発音記号によってどのようにカナ表記が変わってきたのかを知ることができ、個人的に興味深く感じました。

2 日目の今日は、田邊先生を含め、8 人の先生方が発表されました。その中では馬本勉先生の、ロングマンズ英語読本独習書の研究と、河村和也先生の河村重治郎についての研究は興味深いものでした。ロングマンズの『独案内』など、何年も前の貴重な本を拝見させて頂き、また、当時の訳順など、漢文を読むときのように数字が振ってあるのが面白いと感じました。また、そこから、私たちも今ゼミでやっているように、FIFO や FILO などの「こなれ訳」へ繋がっていくというのも、

気になるところです。

河村先生の発表では、河村重治郎が辞書に残した言葉が印象的でした。「辞書は幾回も幾回も引いているうちに、だんだん引き方がじょうずになってくるものです」という言葉です。最近やっと辞書を引くことに慣れてきて、使いこなせるようになったのですが、河村重治郎の言葉を聞き、これからもこの習慣を続け、練習し、英語の上達に繋がりたいと感じました。

<Akim>



西口昌宏大会会長（東京電機大学）の挨拶



江利川春雄学会会長（和歌山大学）の挨拶

## 日本英語教育史学会第 32 回全国大会記念講演

### 「1 人称で語る 大塚キャンパスから筑波キャンパスへ」概要

島岡丘（筑波大学名誉教授シニア・プロフェッサー）

2016 年度の記念講演の演題は「1 人称で語る 大塚キャンパスから筑波のキャンパスへ」であったが、これには副題「昭和 7 年からの歩み」がついており、私の誕生の年と東京文科大学発足と偶然一致する。

発表内容は 3 期に分けられ、第 1 期は「蛸足」大学の時代で文・理・教の 3 学部が大塚にあり、農学部が駒場に、体育学部が幡ヶ谷にあり、交通の不便を感じていた時代である。統一キャンパスにしたいという気持ちは前々からあった。

第 2 期は「コップの中の嵐」の時代で、移転を巡って喧々諤々論じ合った時代である。特に文学部教授会は移転を巡って反対と賛成が角を突き合わせ激しく議論を繰り返した。問題を複雑にしたのは移転反対を叫ぶ学生とそれに近い助手たちがいたことである。教授会が終わる頃、新聞記者が集まって、教授会の様子を翌朝の新聞に掲載しようと待ち構えていた。

ただ、移転に反対なのは、大学としては文学部のみであり、大学の意向表明はどうするかという大学の意思と学内の一部の意思がぶつかった時の処置の仕方は未解決であった。つまり、理・

教・体・農の 4 学部が賛成し一学部が反対した場合はどうするべきかという問題である。これまでの、評議会は「連絡調整の機関である」という朝永学長案では対処できない。文学部の一部の学生は反対署名を集めたり、最後通牒的に文学部は要求が認められなければ「授業をボイコットする」と宣言するに至った。それには文学部教授会の中でも反対が出た。遂に文学部は学生と組んであくまでも反対する集団と、大学の移転に賛成する集まりとに分かれたのである。いわゆる 38 (サンパチ) 教官の誕生である。以後、第 2 文学部教授会のメンバーは他学部と一緒に数年かけて国際 A 級大学のあるべき姿を練りに練り上げたのである。

一方、反対派は反対署名をキャンパスの内外に求めた。『東京教育大学文学部記念誌』(1977)によれば、反対署名は 7,635 名で、学生有志が 1,962 名、同嘆願者が 4,180 名とある。文学部教授会のメンバーは 110 名前後なのに、この署名の数は驚くべきものだった。

第 3 期は「ロビンソン・クルーソー陸の孤島」といわれた時代である。敷地は 75 万坪もあり、ぺんぺん草しか生えていない荒涼とした空間だった。

それから半世紀が過ぎ、世の中は変われば変わるものである。筑波へは秋葉原から北千住を経てつくばエクスプレスが 45 分で結び、東京駅から高速バスで筑波大学中央まで約 1 時間半で結んでいる。

今振り返ってみると、移転の賛成か反対かで学園が荒れに荒れたが、幸いしたのは、東京文理科大学の発足時に石川林四郎という諸事に通じた英語英文学の権威を得たことである。嘉納治五郎校長先生の配慮もあり、2 年半の留学を終えて帰国後、本学の英語学英文学部の主任教授となる。早速『英語の研究と教授』の発行に尽力された。本誌が今日でも自由に読めるのは本誌に対する思いの深さと後世に伝えたいという気持ちとその復刻版の印刷・出版を可能にした。その力になったのは伊藤健三氏である。全体で 5,000 頁にもなる 10 数年間のバックナンバーを一号の欠落なく揃えることが出来たのは、伊藤氏の熱意とその雑誌の意義が幅広く認められていたからである。復刻版を出すことには私の教え子の一人である武蔵大学の古家聡君の友人で同じ北海道出身の阿部修社長が本の友社という出版社を持っていたことも幸いした。阿部社長の好意はそれだけに留まらなかった。復刻版はページ数が多いので、目次と索引は別冊がある方が便利なのでそれも新たに作りましようと言って、別冊『総目次と索引』(156 頁)を高梨健吉氏らによる解説付きで出版していただいた。ちなみに定価は¥5,150 だった。

この索引の誕生によって筑波大で学ぶ学生・院生にとって昭和一桁あるいはそれより前に生まれた先輩たちの努力とその結晶を具体的に見ることができる。教官は定年によって学びの庭から遠ざかる。しかし、復刻版を通して得られる情報は貴重である。まず、追悼文は石川林四郎氏と岡倉由三郎氏が特に多い。テーマは語学や文学に偏らず、ギリシア神話も含まれていた。また青木常雄氏の学校訪問記なども興味深い。福島プランなどは青木氏の訪問記から実態が明らかになる。岡倉由三郎氏の活動は英語教育に特化していなかった。The shark is the swiftest of fish that swims. の文は「うろくずの中で、鮫が一番水切りが速い。」と訳され、英文学者の平田禿木氏を感心させたそうである。

大学の移転は教官がどのような意識を持っているかということが問題となる。単なるキャンパスの移動ではなく、どのような質的変革を期待するかである。初代学群長を勤めた小西甚一教授は次のように語った。「世界に太刀打ちするには従来の解釈学ではだめで、日本文化の土台にたち、英文学をどのように解釈し、オリジナリティを出せることが必要だ。」このような考えから

従来の英文学でなく、比較文化学を成立させるべきだ、という考えで、文学と言語学は独立して別々の発展を遂げるべきとした。また学内対立が起こらないように学部教官会議、学類教官会議など決め事はすべて「仮り決定」とし、最終決定は、学長・副学長会議によることとした。さらに、助手制度を廃止し、教官はすべて学系という研究組織に属し、教育担当は求めに応じて出向くものとした。一見学部自治が大政奉還される形になったが、大学の自治が大幅に認められ、群雄割拠でなく廢藩置県の様相がようやく生まれたのである。

わがキャンパスでも大学移転によって研究・教育が手薄になったのは事実である。しかし、その遅れを取り戻す動きもあった。大学法案が国会で通過して落ち着きを取り戻した 1973 年、反対運動に加わった大塚英友会に取って代わって、「大塚英語教育研究会」が 1973 年 6 月に発足。さらにその翌年 1974 年に研究機関誌 *Otsuka Forum* が発行になった。2015 年で 32 号を数える。その会は会員のサポートもあって、大塚の校舎が新築になる際も中断することなく続けられた。

上記の研究会と平行して、アイリス英語教育学会が創設された。研究機関誌 *IRICE PLAZA* は発足した 1990 年に創刊号を出し、それ以来ずっと発行されている。2016 年には No.26 を発行した。

「大塚英語教育研究会」は毎回著名な業績をあげている人をゲストに招いて夕食会を開いている。そればかりではなく、英語教育の指導的役割をしている先生方との繋がりも重視している。学習院大学の稲村松雄氏、東京電機大学の納谷友一氏は文部省検定英語教科書 *Jack and Betty* の生みの親であるが、私は開隆堂の推薦もあり、著者陣に加わることができた。

以後、教科書の編集会議などを通して多くのことを学ぶ機会があった。ある時、教授会で議論がまとまらなくて困ったときどうするかという話になった。その時、稲村氏にご自分の体験からアマゾンの源流の話がされた。河口に立つと逆巻く濁流に圧倒されるが、川上へ遡ると清らかな清流が流れている。相手の議論に噛み付くことを止めて清流に接するようにしたらどうでしょう、という趣旨を述べられた。また、納谷先生は立派な体格の持ち主で、酒を愛し、人と人の和を大事にされた。また、原稿の締め切りを待つのではなく、少なくとも 1 日早く着くようにと言われたが、これも人の和を大切にすることに繋がっている。また、著者は抽象的な議論ではなく、常にこの部分は具体的にどういように生徒に教えるべきかを力説された。また *heart-warming story* を探し求めなさいとも言われた。

筑波大学は、未来志向のイノベーションの雰囲気がある。私はカナ表記が入門期に考えられてもいいのでは、と提唱したが、反応はあまりよくなかった。そこで、カタカナを強弱・太い細い・肩付符号を伴う SKT 方式で l と r などの区別ができるシステムを提案している。日本英語教育史学会を通していささかでも貢献できれば幸いである。

### 参考文献

島岡丘『日本語からスーパーネイティブの英語へ』創拓社、2004。

島岡丘 (監修)、島岡良衣 (著)『日本語から学ぶネイティブの英語発音』ダイヤモンド社、2013。

青木昭六・島岡丘ほか『サンシャイン英和辞典』開隆堂、1912。

\* 概要の内容と関連する写真については次ページ及び 16 ページに掲載しております。





東京文理科大学 正門



石川林四郎 英文科主任教授

### 研究発表タイトル・発表者一覧

#### 【 第 1 日 】

- ・英語カナ表記の通時的比較—SKT を中心に—  
上野 舞斗 (和歌山大学大学院生)
- ・Let's Learn English の編纂過程：ベーシック・イングリッシュの不採択に焦点を当てて  
広川 由子 (愛知江南短期大学)
- ・『昭和 22 年度学習指導要領英語編 (試案)』を読み直す  
栢田 清 (四天王寺大学)

#### 【 第 2 日 】

- ・東京商科大学予科の英語入学試験問題  
惟任 泰裕 (神戸大学大学院生)
- ・『日本英語教育史研究』掲載論文における研究主題の系統的レビュー  
青田 庄真 (東京大学大学院生)
- ・高校文法検定教科書はなぜ 10 年間で消えたのか  
久保野 雅史 (神奈川大学)
- ・アジア・太平洋戦争期における文部省と陸海軍の外国語教育政策  
江利川 春雄 (和歌山大学)
- ・Thomas Kerchever Arnold (1848) が提唱した‘Complement’—「5 文型」断章 2016  
川嶋 正士 (日本大学)
- ・ロングマンス英語読本独習書に関する研究  
馬本 勉 (県立広島大学)
- ・河村重治郎の考えたこと  
河村 和也 (東京電機大学)
- ・日本英語音声教育史：大正音声学ブームをめぐる  
田邊 祐司 (専修大学)

## 大会関係各位への謝辞

日本英語教育史学会会長 江利川 春雄

第 32 回全国大会 (東京大会) の開催に関しまして、大会実行委員会の皆様にはたいへんご尽力をいただき、まことにありがとうございました。とりわけ、事務局長としての激務に加えて大会実行委員長をお引き受け下さり、さらには研究発表までいただいた河村和也先生、大会担当の拝田清理事をはじめ献身的に働いてくださった役員各位に篤く御礼申し上げます。

アクセスの良い快適な会場を提供してくださった東京電機大学の関係各位、特に大会会長をお引き受け下さった西口昌宏先生に心から感謝申し上げます。

「1 人称で語る大塚キャンパスから筑波キャンパスへ—昭和 7 (1932) 年からの歩み」と題された東京大会にふさわしい記念講演を賜った島岡丘先生、本当にありがとうございました。先生にしか為し得ない素晴らしい講演で、50 ページを超すハンドアウトも第一級の資料です。

3 人の若い大学院生を含む研究発表者の皆様、見事なご発表を通じて新たな知見と元気を頂きました。ぜひ学会紀要へのご投稿もお願いいたします。

おかげさまで、記念講演、研究発表、懇親会に至るまでたいへん盛会かつ和やかな雰囲気のうち、円滑に大会を終了することができました。総会では、大幅な会則改正や役員改選を含む重要な議題も滞りなく可決承認いただきました。新たな役員体制のもとで第二期目の学会運営に邁進する所存ですので、今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。ありがとうございました。

## 第 32 回全国大会を終えて

大会実行委員長 河村 和也 (東京電機大学)

第 32 回全国大会 (東京大会) は、延べ 55 名の方々にご参加いただき、滞りなく 2 日間の日程を終えることができました。各地よりお越しくくださったみなさまに、あらためて厚くお礼申し上げます。

東京電機大学が創立の地である神田を離れ千住にキャンパスを構えたのは 4 年前のことです。昨年よりここに勤めることとなった私にとって、研究例会ばかりでなく全国大会でみなさまをお迎えすることは大きな願いでしたが、これを果たし得たことをうれしくありがたく思っております。本大会の開催にあたりお力添えくださいましたみなさまに、心より感謝申し上げる次第です。

今回、実行委員会は少数精鋭の体制を取りましたが、委員諸氏の勘どころをつかんだ緻密な仕事ぶりには、ただただ感心するばかりでした。数々のトラブルをやすやすと乗り越えてくださったみなさまに、この場をお借りしてお礼申し上げます。

\* \* \*

この 2 日間のプログラムは、私たちの会のよい伝統に大会特有の華やかさが加わり、たいへん印象深いものとなりました。

島岡先生には「1 人称で語る大塚キャンパスから筑波キャンパスへ」のタイトルでご講演いただきました。まさに「1 人称」の視点によるお話で、お示しいただいた貴重な資料とともに、大会の意義をいっそう深めてくださいました。

研究発表は 11 本が展開されましたが、英語教育史という共通のキーワードのもとにも、さまざま

まの問題意識が存在することをあらためて認識する好機となりました。発表も質疑応答も限られた時間でしたが、相互に深め高め合うという真摯な姿勢に貫かれたものであったと思います。

懇親会は本学のカフェラウンジで開催しましたが、みなさまにご好評いただき安堵しております。必ずしも広々とした豪華な会場ではありませんでしたが、開放感と親密感を兼ね備えた雰囲気、この会にふさわしいものでもあったかと密かに思っております。

\* \* \*

みなさまをお迎えした千住のまちは、『おくのほそ道』の「矢立の初」の地として知られていますが、芭蕉がここをあとにその長い旅に出たのは「弥生も末の七日」であったといひます。これは旧暦の3月27日。現在の暦では5月16日に当たるのだそうです。

全国大会の翌日こそがまさにその日でした。ところが、そのことに気が付いたのは、いつものように出勤し、前日までの二日間の賑わいをいくらか感傷的に振り返っているときのことでした。バタバタと駆け回るように過ごすばかりで、そんなこともご案内せぬままみなさまをお見送りしてしまったことが、今さらながら申し訳なく思われてなりません。

みなさまにおかれましては、研究例会の折にでもまた千住の地をお訪ねいただき、わずかに残るいにしへの面影に触れていただければ幸いです。そして、かなうことであれば、この地での2度目の全国大会でみなさまをお迎えできればと願っております。

---

## >> 2016年度 会員総会 報告

2016年度の会員総会は、大会初日の5月14日、開会式に引き続いて東京電機大学東京千住キャンパス10206室(1206セミナー室)で開催されました。副会長の佐藤恵一氏(日本大学〔非常勤〕)の司会で始まった会は、最初に川嶋正士氏(日本大学)を議長に選出し、以下の議事を進行しました。

### ○活動報告・会計報告

事務局長の河村和也(東京電機大学)による活動報告(会務報告)ならびに会計報告に続き、安部規子氏(久留米工業高等専門学校)・平賀優子氏(慶應義塾大学〔非常勤〕)による会計監査報告が議長により代読され、2013年度の会計報告については拍手をもって承認されました。

### ○役員選出等

江利川会長の任期満了にともなう新役員の選出については、選挙管理を担当した事務局長より締切までに以下の立候補があったことが報告されました。

会 長 江利川春雄(和歌山大学)  
副会長 馬本 勉(県立広島大学)  
副会長 田邊 祐司(専修大学)

総会では全員を新役員として選出。引き続き、江利川会長より新役員体制についての方針の説明とともに学会運営についての所信が表明されました。新たな役員体制は以下の通りです(新たに就任した役員には波線を施してあります)。

## 2016年度 日本英語教育史学会役員

会長	江利川春雄				
副会長	馬本 勉	田邊 祐司			
事務局長	河村 和也				
理事	赤石 恵一 藤本 文昭	川嶋 正士 若有 保彦	河村 和也	隈 慶秀	拝田 清
評議員	青木 庸效 庭野 吉弘	今野 鉄男 茂住 實男	佐藤 恵一	島岡 丘	西 忠温
幹事	青田 庄真	上野 舞斗	榎本 剛士		
顧問	小篠 敏明	出来 成訓			
名誉会長	竹中 龍範				
論文審査 委員	竹中 龍範 (委員長) 馬本 勉 江利川 春雄 河村 和也 佐藤 恵一 田邊 祐司				
紀要編集 委員	馬本 勉 (編集長) 榎本 剛士 隈 慶秀 藤本 文昭				
会計監査	安部 規子	平賀 優子			

## ○会則の改正 (審議事項)

会則の大幅な改正は懸案となっていましたが、会長の江利川春雄氏 (和歌山大学) より改めて別紙の通り提案され、拍手をもって承認されました。

## ○学会賞

今年度の日本英語教育史学会賞については、「該当者なし」との報告がありました。

## 2015年度会務報告 -----

## 1. 全国大会

第31回全国大会は、2015年5月16日(土)・17日(日)の両日にわたり、福岡県久留米市の久留米工業高等専門学校を会場に開催した。

## 2. 学会誌

2015年5月、学会誌『日本英語教育史研究』第30号を刊行した。

## 3. 会員動静

2015年度中の入会者は9名、退会者は5名で、年度末の会員数は127名となった。2016年4月以降1名の入会申し込みがあり、会員総会時点での会員数は128名である。

## 2015年度会計報告 -----

## 2015 (平成 27) 年度 日本英語教育史学会収支決算報告

2015(平成 27)年 4 月 1 日 ~ 2016(平成 28)年 3 月 31 日

収入の部		支出の部	
繰越金	1,528,557	月報関係費	59,754
学会費	601,000	事務活動費	143,781
紀要代金	0	大会補助費	50,000
広告代金	0	紀要経費	322,410
雑収入	2,652	雑費	1,566
寄付	0	支出合計	577,511
郵便局利子	292		
銀行利子	1		
収入合計	2,132,502	繰越金	1,554,991

以上相違ありません。

2016年5月14日

事務局会計 河村 和也 印  
 会計監査 平賀 優子 印  
 同 安部 規子 印

#### 1. 収入の部に関して

学会費収入は、前年の485,000円から601,000円へと大幅に増加した。ご協力くださった会員のみなさんにお礼申し上げます。

#### 2. 支出の部に関して

繰越金は1,554,991円で前年度比26,434円の増となり、引き続き単年度の黒字を計上している。今後とも、安定した収支を維持するため努力したい。

### >> 事務局より

全国大会の終了後、今年も全国の会員のみなさまに向けて学会誌および会員名簿を発送しました。事務局の不手際により発送までに半月ほどの時間を頂戴することとなり、心苦しく存じております。お待ちいただいたみなさまにお詫び申し上げます。

例年通り会費納入をお願いする文書（「紀要の送付と年会費の納入について」）を同封しましたところ、多くのみなさまにさっそくご対応いただきました。厚く御礼申し上げます。

期限は特に定めておりませんが、その他のみなさまにおかれましても早期の納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費	一般：5,000円 / 学生・院生：3,000円
	*2016年度より、学生・院生は初年度の会費が免除されます。
送金先	ゆうちょ銀行：(振替口座) 00150-3-132873
	三菱東京 UFJ 銀行千住中央支店：(普通口座) 0997182
	*口座名義はいずれも「日本英語教育史学会」です。

全国大会までに今年度分をお納めくださったみなさまには、納入日を記した文書（「会費紀要の送付について」）を同封してありますので、どうぞご確認ください。また、全国大会にお越しになったみなさまには、原則としてその場で会費をお納めいただき学会誌および会員名簿をお渡ししております。

なお、1年もしくは2年分の会費が未納の方には、この会報の発送に合わせて「会員継続のご案内」のみをお送りいたします。ご確認のうえ、よろしくご対応くださいますようお願い申し上げます。

(会計担当)

## ≫ 研究例会の予定

今年度より研究例会は5月を除く奇数月の「第3土曜日」に開催します。ただし、1月についてはセンター試験と重なるのを避け「第1土曜日」の開催とします。どうぞお間違えのないようお願いいたします。

なお、11月を除き連休に当たりますので、遠方よりお越しの方は交通・宿泊に充分ご注意ください。

- ◆ 第258回研究例会 2016年7月16日(土) 東京都で開催予定
- ◆ 第259回研究例会 2016年9月17日(土) 広島市で開催予定
- ◆ 第260回研究例会 2016年11月19日(土) 東京都で開催予定
- ◆ 第261回研究例会 2017年1月7日(土) 東京都で開催予定
- ◆ 第262回研究例会 2017年3月18日(土) 大阪市で開催予定

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要(100~200字程度)、(4) 使用予定機器、以上の4点を明記の上、発表希望月の前々月10日(3月発表希望であれば1月10日)までに例会担当の川嶋正士へお申し込みください。

Email: [reikai@hiset.jp](mailto:reikai@hiset.jp)

## ≫ 英語教育史フォルダ

- ◆ 山田 昌宏『岡山県中学校・高等学校 英語教育史年表』(自費刊行)
- ◆ 若林 俊輔(著)、小菅 和也、小菅 敦子、手島 良、河村 和也、若有 保彦(編)『英語は「教わったように教えるな」』研究社、2700円

## ≫ 新入会員(敬称略)

- ◆ 松岡 翼(まつおか つばさ) 和歌山県 和歌山大学大学院教育研究科
- ◆ 丹羽 温子(にわ あつこ) 和歌山県 和歌山大学大学院教育研究科

**EDITOR'S BOX** 6月も下旬になり、夏の暑さが少しずつ厳しさを増してきたように思います。前回会報を発行してから3ヶ月近くが過ぎましたが、その間に熊本では地震や大雨などの災害が続きました。被災された方々が一日も早く平穏な生活に戻れることを心からお祈りしております。(若)

## 第 258 回 研究例会のご案内

日 時： 2016 年 7 月 16 日 (土) 午後 2 時～  
会 場： 東京電機大学 (東京都足立区千住旭町 5 番)  
東京千住キャンパス 1 号館 2 階 10224 室 (1224 セミナー室)

研究発表

### 「戦後の高校英文法教育史 (その 1) : 検定教科書の 9 年間と, 自由化後の高校現場」

発 表 者 : 久保野 雅史 (神奈川大学)

【概要】5月の全国大会では、①高校文法検定教科書の廃止は、学習指導要領の改訂と直接的には関係していないこと、②教科書の種類は「検定受理種目」で決まること、③文法教科書廃止後も、高校では「準教科書・副教科書」と呼ばれる教材が採用され続けたこと、等を指摘した。

今回の発表では、検定受理種目から文法が消えた経緯について、教科書検定関係者への聞き取り調査を行った結果を踏まえて、種目の改廃・変更がどのように起案され審議されてきたのか報告したい。また、江川泰一郎の A New Guide/Approach to English Grammar と『英文法解説』、安井稔の A Better/Shorter Guide to English Grammar と『英文法総覧』を具体例として取り上げ、文法検定教科書廃止前後の文法教育の状況を明らかにしたい。

自著を語る

### 「近代日本の陸海軍を英語教育史から見直す： 江利川春雄著『英語と日本軍：知られざる外国語教育史』を素材に」

提 案 者 : 江利川 春雄 (和歌山大学)  
指定討論者 : 横山 多津枝氏 (防衛大学校)

【概要】日本軍の近代化に果たした外国語の役割、陸海軍における外国語教育の実態、アジア・太平洋戦争期の英語軽視と敗戦との関係、米軍の日本語教育との対比、戦前と戦後の連続性などの諸問題を、英語教育史の視点から読み解きます。約 15 年に及んだ資料収集、旧軍人への取材の苦労、繰り返される原稿の書き直し。涙と感動の裏話も聴いてやってください。

参加費：無料

問 合 先 : 川嶋 正士 (email: [reikai@hiset.jp](mailto:reikai@hiset.jp)) 学会ウェブサイト : <http://hiset.jp/>

★会員外の方の研究例会へのご参加を大いに歓迎いたします。

【会場案内】 (東京電機大学ウェブサイトより)



【交通案内】 JR 常磐線・東武スカイツリーライン・地下鉄日比谷線・地下鉄千代田線「北千住駅」東口 (電大口) 下車徒歩 1 分

日本英語教育史学会第 32 回全国大会記念講演概要の内容と関連する写真(9 ページからの続き)



岡倉 由三郎 氏



福原麟太郎 文学部長



『英語の研究と教授』5 巻

『総目次・索引』

Otsuka Forum ~32 号(2015)